「衣、キリストにかわる」

ヨハネの福音書１９：２３－２４

March.24.2024

ヨハネの福音書１９：２３－２４（パワポ）

Preface

私が幼い頃、家庭の事情で、母方の韓国のお祖母ちゃんと伯母さんの家で長い間過ごしことがありました。

その住んでいた家の近くに、定期的にリヤカーを引いた飴売りのおじさんがやって来るのですが、子どもたちが空き瓶や穴の開いた鍋や鉄くずやいらなくなったゴム製品等を持っていきますと、その持ってきた物の価値に従って、手作りの田舎飴をはさみでカシャカシャ鳴らしながら切ってくれました。

子どもたちの中には、その飴欲しさに、親に内緒で穴の開いていない鍋だったり、まだまだ使えるゴム靴などを持ってきて、飴に代えてもらう子たちがいました。

酷い場合ですと、お母さんの指輪を持ってきて、飴に代えようとして大目玉を食らう子たちもいました。

ある意味、中々の強者だとも言えると思いますが、その内実は、物の価値を知らない未熟な幼稚な行為と言えるでしょう。

今読みました聖書箇所に登場してきますイエス様を十字架につけた兵士たちは、正に、高価な指輪を飴玉に代えてホクホクしながら、ほくそ笑みながら喜んでいる未熟な幼稚な、価値の分からない子どもたちと何ら変わらない人のように思えてきます。

目には見えない神のかたちなるお方であり、すべての造られたものに先んじ、天にあるもの地にあるもの、見えるもの見えないもの、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、万物をお造りになった方であり、すべてのものはこの方のために造られたお方、天の下にこの方以外の誰によっても救いはなく、この方以外には救われるべき名は人間に与えられていないお方神の御子イエス・キリストを、着古した服と下着とに代えてしまい、この方を十字架に架けたことを「よくやった」と思いながら、ほくそ笑みながら、「服が一着増えた」と喜んでいる姿は、正に、田舎飴と指輪を代えた価値の分からない子どもたちと何ら変わりがないように見えます。

サタンや悪霊たちは、イエス様がどういうお方なのかが分かっているのに、我々人間は、イエス様が分からない。

神の前に盲目な人間の姿を、兵士たちは２０００年前にその身をもって体現してしまいました。

Part One

私たちキリスト者は、イエス様に一度もお会いしていないにも関わらず、イエス様を信じています。

では、何が良くて信じているのでしょうか？

どんな良いことをして下さったために、信じているのでしょうか？

なにゆえに、こんなにもイエス様のことが好きで、お慕いしているのでしょうか？

イエス様が私たちを富む者と、お金持ちにして下さったからでしょうか？

イエス様を信じる者は病にかからないようにして下さり、もし病にかかったとしても癒して下さるからでしょうか？

貧しい方々の中にも、イエス様のことが好きで、貴く思い、慕っておられる方々がたくさんおられます。

重い病の中にあっても、闘病中であっても、イエス様をお慕いし、祈りと賛美を献げることを止めず、イエス様のことを愛しておられる方々がたくさんおられます。

苦難の中にある人も、逆境の中にある人も、患難の中にある人も、イエス様のことを愛しております。

なぜでしょうか？

イエス様は、この世にないものを、この世界に無いものを下さったから、下さるからです。

ひと時の欲望を満たしてくれる祝福まがいの偽の祝福のようなものではなく、本当の祝福をお与え下さるからです。

風のように過ぎ去っていく一時の快適さではなく、まことの平安を、ありとあらゆる宣伝文句に飾られた世の楽しみではなく、まことの喜びを。

偶然の産物だと説き、時間をどう刺激的に消費していくのかばかりに執着した、世が唱える色映えを目標とした人生を生きるところから、必然の、神のご計画の下、明確な照準をもって、神から期待されている本当の私の人生を、救いを、天国を、神の国を、神の子としての身分の回復をお与え下さるから、貧しくても、病にかかっても、患難に会っても、死に直面しても、私たちはイエス様を貴く思い、慕い求め、愛しながら生きています。

生きているはずです。

生きていますよね？

でも正直に、冷静に、自分自身のことを振り返った時、果たして、指輪を飴玉に代えるように、イエス様を高が知れた服一着に代えるようなことをしながら生きているのではないだろうか、イエス様を十字架に架けておきながら、戦利品だと思っている大したことのない服一着を喜ぶようには生きていないだろうか。

「イエス様が、私の身代わりに十字架に架かって下さって救われた」という

名分を掲げてはいるものの、その名分を掲げているだけで、または、時と場合と状況によっては、その掲げている名分にいつでも覆い隠すことの出来る布を持ち歩いては、都合よく布を掛けたり、掛けなかったりしながら、世渡り上手に生きることのためにイエス様を利用しているのではないだろうか。

「イエス様が、私の身代わりに十字架に架かって下さった」というその十字架を負って、従って、たましいに安らぎを得ながら生きるのではなく、肉の安らぎと願い事を叶えて頂くためのお守り、魔除け、まじない程度にしか思えていないがために、イエス様を信じているとは言うものの、いつも不安の中を生きているのではないだろうか。

あの貴いイエス様を十字架に架けて殺すほどに、いったい何に欲を出しているのだろうか？

イエス様がお召しになっておられた衣と下着とそれよりもちょっと高価な上から全部一つに織った縫い目のない衣に欲を出し、イエス様を得ることに欲を出さない。

イエス様と過ごすことに、イエス様の御言葉に従うことに、イエス様のお言葉に生きることに、イエス様にお会いすることに欲を出さない、イエス様の価値が分からない兵士たちの姿は、私（たち）自身の姿でもあり得ると思わされてしまいます。

「兵士たちがもしこのまま、イエス様の価値が分からず、イエス様の価値を見誤り、イエス様の存在を見抜けずに、このまま人生を終え死んだならば、父なる神の前に、主イエス様の前に立って、どれだけ地団太を踏んだことだろうか」と思うのです。

「どれだけ、恥ずかしくてたまらなかったことだろうか」と思うのです。

Part Two

説教前に、「キリストには代えられません、世の宝も、富も、有名な人になることも、人の褒める言葉も、いかに美しいものも、世の何ものも、この方が私に代わって死んで下さったゆえに、キリストには代えられません」と歌いましたが、正直なところ、私たちには、主イエス様よりも尊いものがたくさんあるのではないでしょうか。

主イエス様に、代わるものがたくさんあるのではないでしょうか。

例えば、今の土浦めぐみ教会は、幸いにも、感謝にも、恵みにも、７０年前とは比べものにならないぐらい見た目には恵まれ、豊かになったと思います。

７０年前は、こんなに大きな礼拝堂もありませんでした。

土浦めぐみ教会と言えば、「ああ、あのイオンの隣にある教会ね」と言われるように有名でもありませんでした。

子どもたちが元気に遊びまわるグラウンドもなければ、こんな素晴らしいピアノやオルガンもありませんでした。

納骨堂もありませんでした。
ましてや、幼稚園、小中学校、介護・障がい者福祉事業なんて本当になるなんてことはもしかしたら考えも及ばず、宗教法人土浦めぐみ教会の下で働き収入を得ている職員が５０名を超えるような社会的に見たら立派な事業体になるとは、もしかしたら想像も出来なかったかもしれません。
７０年経った土浦めぐみ教会は、よく言えば、教会に足を運ぶための何かしら取っ掛かりになるもの、気を引くものがたくさんある教会になったと思います。
確かに、神の恵みゆえの豊かさがたくさんあると思います。
「ここに来れば何となく楽しいし、リフレッシュ出来るし、それなりに癒されるし、良い人たちもいるし、生まれる前から通っていて僕の私の居場所があるような気がするし、居心地もいいし、土浦めぐみ教会という事業体で働き、収入も得られるし。」
それはそれで、とても豊かだと思います。

しかし、７０年前にこの土浦の地で産声を上げた土浦めぐみ教会には、何にもありませんでした。
ただ一つを除いては、何もありませんでした。
そして、その大切な一つは、確固たるものでした。
主イエスへの愛です。
主イエスへの忠誠心です。
主イエスを好きだと思う気持ちです。
主イエス・キリストには代えられない、宝も富も名声も美しいものも人の褒める言葉も誉れも、何ものにも代えられないという告白とそれに生きようとした決心です。
それ一つで、ここまで、この教会がやって来たと信じたいですが、では今いる私たち一人一人を考えた時、それ一つでキリスト者をやっているのか、それ一つでこの教会に集っているのか、それ一つでこの教会で働いているのかを、この受難週のひと時、服一着でイエス様を十字架に架けた兵士たちの姿から学び、吟味したいと思うのです。

Part Three

私は牧師ですので、ある意味、イエス様を伝えることでたくさんのモノやコトやヒトを得ながら、この生活が守られています。
生計が保たれています。

２４年前、牧師になるように神さまから示されたと思い、その学びへと進み、その道を歩もうとして行く中で、一つ強く思わされたことがありました。
それは、「決して、サラリーマン牧師・職業牧師になってはいけない」ということです。
「サラリーのために、収入のために、生計を立てるために牧師をやり、生活

するために牧師という職業に就き、やり続けてはいけない」ということを思わされました。
　それはある意味、「この世への執着と迎合に繋がり、目に見える世界に没入しながら、そこに染まりながら、語るべきことを、示すべきことを、生きるべきことを生きられなくなるからだ」と思ったからです。

　でも今、もう一度そのことを考えてみますと、「本当にそのように生きられているだろうか」と思わされます。
　「キリストに代えてしまった衣はないだろうか」と考えさせられます。
　本当に、「『世の宝よ、世の富よ、世の名声よ、世の楽しみよ、世の美しいものよ、人の褒める言葉よ、行け。行ってしまえ！　世の何ものも、キリストには代えられません』と生きることが出来ているだろうか」と思わされます。

　「説教、とても良かったです。癒されました。素晴らしかったです。恵みを受けました」という言葉を聞きたいと思いながら、牧師をやってはいないだろうか。
　聖書が語っていることと、世の中が語っていることがぶつかった時、聖書の側に付きながら語り、生きているだろうか。
　神を恐れる知識と知恵が、世の学識と世の知恵と相容れない時、人を恐れず神を恐れることを選択し、追求出来ているだろうか。
　生活水準の向上を目標に生きているのではなく、霊的水準の向上を目的にキリスト者を生きることが出来ているだろうか。
　本当の祝福と偽物の祝福を取り替え、取り違えてしまってはいないだろうか。
　イエス様を十字架に架けておきながら、イエス様が来ておられた布っ切れ如きに欲を出し、大事なことを見失ってはいないだろうか。
　神を信じると言いながら、立派なバアル信奉者にはなっていないだろうか。
　キリストを、神の言葉を語ると言いながら、バアルやマンモンの神々を語ってはいないだろうか、生きてはいないだろうかと考えさせられます。

Conclusion

　以前、私が青年主事だった頃、青年会のミーティングの中で、「聖書の学びもいいけど、もっと楽しいことしませんか。ボーリングしたり、カラオケに行ったりしながら、もっと青年会を盛り上げていきましょうよ」という意見が出て、定期的に青年会ボーリング大会を開くこととなりました。

　すると、結構楽しい集まりになりました。
　ところが、何ヶ月か行った後、当時の青年会のリーダーがこんなことを言い始めて、そのボーリング大会はお終いになりました。
　「楽しいことは世の中にいっぱいあるので、その楽しいことを教会でやれれば、なんかもっと楽しくなると思ったんですけど、実際やってみて、世の中の楽しみと全然変わらないことをやっても、あんまり楽しくないなあと思いまし

た。今後はジタバタせず、教会だからこその楽しみである聖書の学びと分かち合いを避けずに、先ずそのことを大事にしたいと思います」と言うのです。
「感謝だなあ」と思いました。

指輪を飴玉と変えてみたら、始めは、甘くておいしいように感じたけれども、飴を舐めているうちに、「うん、ちょっと待てよ。これって、本当にこれで良いのかなあ？」と思い始めてくれたんだと思っております。

「キリストには代えられません。世の何ものをもキリストに代えられません」という賛美が私たちの賛美となり、私たちの生き様となる幸いを共に味わって行きましょう。
お祈りいたします。
祝祷：ピリピ人への手紙３：７－８ａ